

# ポスト漁業時代の北西海岸先住民による起業状況

— クワクワカワクウ社会における調査の中間報告 —

立 川 陽 仁

## 1 問題の所在と目的

伝統的に狩猟採集を営んできた北米の先住民にとって、19世紀突如彼らの社会に押し寄せてきた「近代化」の波は、彼らの社会を激変させ、ほとんどの場合は多大なる受難をもたらした。とくに資本主義経済の流入は、彼ら先住民をアメリカおよびカナダという国家の周縁に追いやる上で、きわめて大きな影響を与えたといつてよい。

しかしそのような状況においても、こうした近代化の波にうまく適応した先住民もごくわずかながら存在する。たとえばカナダ太平洋沿岸（いわゆる「北西海岸」）の先住民がそうだとされている。この地域においては、いわゆる近代産業はおもに商業的な漁業や林業、製造業などの形で流入したが、先住民はおもにサケを対象とした漁業と缶詰業に積極的に参入することで多大な経済的成功を収めることができた。なかでも沿岸中央部（バンクーバー島北部周辺の水域）を主たる活躍の場としたクワクワカワクウ（Kwakwaka'wakw）という先住民は、サケ資源の減少が囁かれ、漁業が構造改革を必要とした20世紀半ば以後も、1980年代まで漁業で活躍したことが知られている（立川 2009）。

しかし1990年代以降サケの減少はよりいっそう顕著になり、ついには2009年、カナダ太平洋沿岸のサケ漁業を支えてきたブランド種である「フレイザー・ソックアイ」（フレイザー川に遡上するベニザケ）の遡上数が壊滅的な減少を記録するにいたった。この問題の解決のために当時のカナダ首相の命で組織されたコーエン・コミッションも、やがてはフレイザー川のベニザケとは直接関係のない議論にすり替えられたこともあり、大きな成果をあげずにいるといつてよいだろう（BOCKING 2012; VIATORI 2019; 立川 2020）。いずれにしても、2020年現在、フレイザー川のベニザケ数はいまだ増加傾向にない。

そのせいで、現地の先住民、とりわけ20世紀後半までは漁業から多大な経済的恩恵を授かってきたクワクワカワクウは大きな打撃を被っている。漁師をつづけてきたクワクワカワクウのある者は漁船とライセンスを売り払って完全に漁業から撤退し、またある者は複数所持していた漁船の一部を売り払い、規模を縮小せざるを得なくなっている。こうして漁業から完全に退いた先住民も、関係を持続させながらも規模を縮小した先住民も、働くための他の方法を模索しなくてはならなくなっている。

こういった状況をふまえ、本稿では、漁業操業だけで食べていけなくなったクワクワカワクウのある親族集団が近年になって開始した新たな事業を報告する。これらの事業には、もう20年つづく安定したものもあれば、1年前（2019年）に「果たして本気でビジネスをやろうとしているのか」と私が疑問に思ったほど、あまりにも容易に着手され、すぐに破綻しそうなものもある。しかしいずれの事業も、私からすればとりあげる価値の十分あるものである。そしてこれらの事業を紹介した後、1) その事業は衰退する漁業にとって代わることができるか、2)

その事業は他の先住民によっても実施可能か、つまり他の先住民の「手本」になり得るか、3)、もし可能なら、その条件は何かという点から、分析を加えようと思う。

なお、ここで紹介される事業は、おもに2018年10月（1週間）および2019年9月から10月にかけて（3週間）、私がフィールド調査で得たデータをもとに記述される（1）。フィールド調査は先住民がおこなうまさにその事業を「自分の目で確かめる」という意味ではきわめて重要な作業ではあるが、データ入手の方法として考える場合、実際にはフェイスブックを使った先住民とのやりとりこそが、今回もっとも役に立ったことを私は認めなくてはならない。データ入手に関するこうしたSNSの重要性は、2020年の海外渡航が困難な状況においてはなおさらである。

## 2 調査対象——クワクワカワクウのWクラン

### 2-1 クワクワカワクウとその社会構造

今回とりあげるのは、クワクワカワクウと呼ばれる北西海岸の先住民族集団のなかの、あるひとつの親族集団の人びとである。

クワクワカワクウはカナダ太平洋側のバンクーバー島北東部、およびクィーン・シャーロット海峡を隔てた北米大陸側を生活圏としてきたが、現在ほぼすべての人口はバンクーバー島東

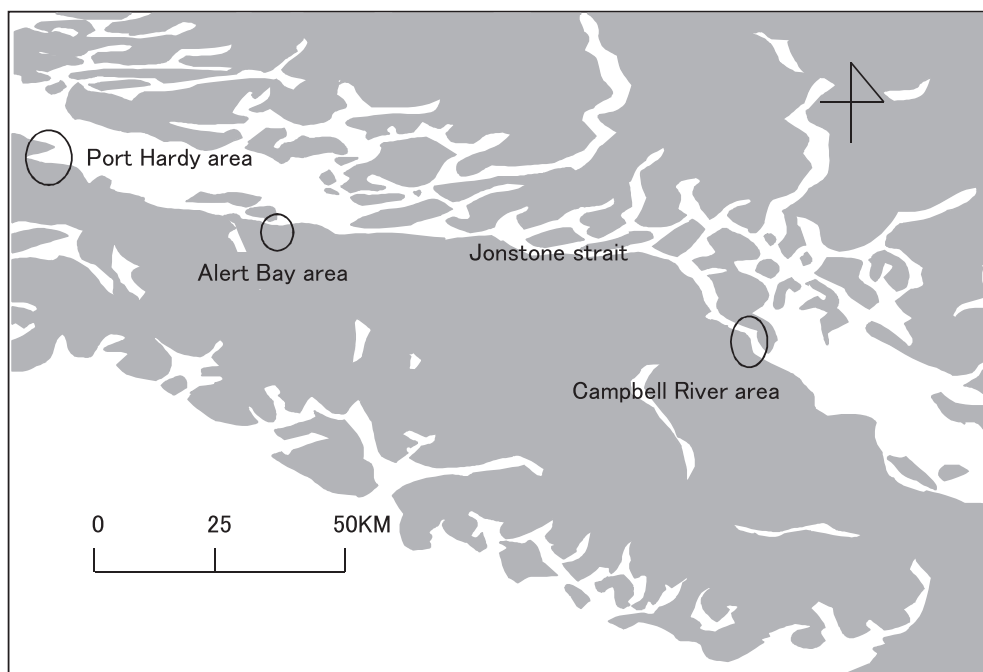


図1 クワクワカワクウの居住地域

岸の3つの町に住んでいる（図1）。

人類学的な研究および地理学的研究によると、クワクワカワクウには2つのレベルの下位集団がある。まず、クワクワカワクウという先住民族集団は、15から20くらいの「冬村集団」（winter village group）にわかれ、さらにこの冬村集団はいくつかのクランにわかれる（BOAS 1966;

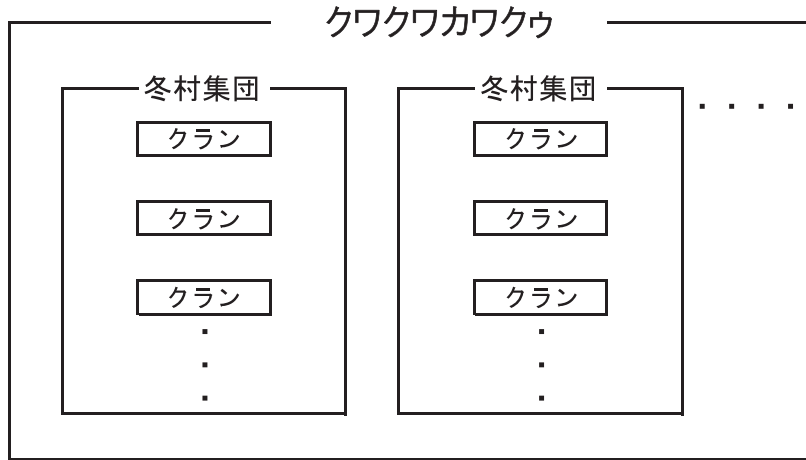


図2 クワクワカワクウの社会構造

DONALD and MITCHELL 1975; GALOIS 1994)。これを簡単に図説したものが図2である。

クワクワカワクウにとって、いわゆる核家族的単位（夫婦とその子どもたち）は必ずしも重要な社会単位ではなかった。かつてそれは共住単位ですらなかった。むしろ重要なのは、血縁関係のある核家族的単位を複数（4つから6つほど）収容できる1つ（あるいは隣接する複数）の長屋とともに暮らす、20人から100人規模の集団だった。この集団はかつて彼らの言語で「ヌマイム」（numaym）と呼ばれていたが、現在ではクランと呼ばれることが多いので本稿でもこの語を採用したい。クランは共住の単位であっただけでなく、1年のほとんどの生業活動を営む単位でもあり、またポトラッチという儀式を主催する単位でもあった。クランは、あえて極言するならば、われわれ日本人がいうところの「〇〇家の一族」というイメージである程度捉えられる。以下にとりあげるWクランの人びとは、そのほとんどがセディン（仮名）という姓をもつ人びとなので、その意味で「Wクラン≡セディン家の一族」という見方はあながち間違っていない。婚出した女性、婚入した女性はもちろんクランの成員権を主張できるし、婚出した女性の子孫たちも、また婚入した女性の血縁者も、望めばクランの一員となれることもある。また、私自身がそうであるように、儀礼的な手続きを経ることで「あかの他人」がクランの一員になることもある。この意味で、クランはいわゆる出自をベースにした集団よりはるかに自由度が高い。

かつてのクワクワカワクウでは、クランの男性成員は1人1人ランク付けされていた。つまり、仮にクランに20人の男がいたとすると、彼らは1位、2位、・・・20位と順位づけられていたのである。現在ではこうしたランキング制度はなくなったが、それでもつねにランキング1位の人物だけは特定され、世襲チーフ（hereditary chief）と呼ばれ社会的なリーダーを務めている。伝統的に、世襲チーフの継承には明確なルールはなかったが、現在は長男の継承が一般的なようだ。

かつて、いくつかの血縁・地縁のあるクランは冬になると集まって、儀式的なシーズンをともに過ごす単位を形成した。この単位はかつて多くの古典的民族誌で「部族」（tribe）と呼ばれていたが、私はこの集団の本来の機能に即し、ドナルドとミッチェルに倣って「冬村集団」と呼ぶことにする（DONALD and MITCHELL 1975）。クワクワカワクウにおいては現在、カナダ政

府による先住民行政の単位であるバンドが、おもにこの冬村集団をベースに構成されている。

## 2-2 W クランの人びと

ではつぎに、本稿でとりあげる W クランの人びとについて紹介したい（次節にある図3も参照のこと）。

W クランは、かつてビレッジ島周辺を生活圏としてきた冬村集団 K のなかの、クランの1つである。1973年、当時の W クランの世襲チーフであった JA 氏とその家族がアラート・ベイからキャンベル・リバーに移住し、この地の居留地内外に住み込んだ。JA 氏の子どもや孫たち、さらにひ孫たちが結婚し、子どもをもつにしたがってキャンベル・リバーにおける W クランの成員、つまりセディン（仮名）姓は数を増すことになる。現在、キャンベル・リバーでセディン姓をもつ者、およびセディン姓をもたないが明らかに W クランの一員と考えている人びとの数は、100人を下らないところにまで増えている。

JA 氏の後を継いで世襲チーフになったのは、彼の次男 BO 氏だった（長男は幼くして死亡した）。BO には7人の子どもがいたが、その長男だった HA 氏が2005年、まだ BO 氏が存命中に世襲チーフの座を継いだ。HA をのぞく BO の子どものうち、本稿に登場するのは EU、RI、BN という弟たちである。

現世襲チーフの HA 氏には5人の子どもがいる。長男 JI は、次期世襲チーフと目されている、現在（2020年）45歳の男である。この JI には NO（現在42歳）、MI（現在39歳）という弟、そして BA（現在37歳）、DA（現在29歳）という妹がいる。また、HA の兄弟のうち RI と BN には子どもがおり、その何人かは次節でとりあげる新たな事業に参加している。それについては次節および図3を参照されたい。

JA 氏は1930年代からサケ漁業で活躍する漁師であった。まき網漁船のエンジニアとしてキャリアをスタートさせた彼は、やがて缶詰工場の所有するまき網漁船の「雇われ船長」になり、ついにはみずからの漁船を購入して自身の船の船長になった（2）。さらに彼は、漁業の操業にとどまらず、それで得た収入を資本に製材所や雑貨屋の経営に乗りだしたこともあった。北西海岸、とりわけクワクワカワクウにおいては、JA のように漁業という産業に対して明るい未来をみだし、投資をするという企業家気質の先住民はけっして珍しくなかった。いくつかの自叙伝を散読しただけでも、ビリーとハリー・アスー（Billy and Harry Assu）父子、モーゼス・アルフレッド（Moses Alfred）などの名が同様の例として容易にあげられる（ASSU 1989; SPRADLEY (ed.) 1969）。

JA 氏が漁業で生計を立てていく道筋を示したのに対し、息子の BO 氏はその活動規模を拡張した人物である。若いころから JA 氏の漁船で働き、JA 氏が引退してからは彼に代わって船長を任された BO は、父 JA の死後、まず所有する漁船の数を増やし、つぎに操業をするクルーたちをクランの男性成員たちで固め、さらには彼らを「社員」とした漁業会社、〈PF 社〉を設立した。自身の漁船のクルーをクランの成員で占めることにこだわらなかった父 JA と違い、BO は半ば強制的にクランの成員たちをクルー（兼社員）にすることで、文字通りクランを単位とした一族経営に乗りだしたといえる。

私が彼らとともにニシン漁業とサケ漁業のシーズンすべてに参加した2000年当時、〈PF 社〉には4隻のまき網漁船があった。これら4隻の船長を務めたのが BO の息子3人（HA、RI、BN）と BO の義理の弟で、BO の孫たちがそれぞれの船のクルーを務めていた（詳しくは立川 2009

を参照)。BO 自身は 2000 年春のニシン漁のシーズンを最後に現場から退き、以後はクルーの人事、給与の分配など「オカ」の仕事に専念した。

BO 氏の死後、〈PF 社〉の経営は彼の長男 HA 氏に託されたが、先述の通り、2009 年以後の極度の漁業不振と政府による操業不認可のため、HA は 4 隻あった漁船のうち 3 隻を売り、〈PF 社〉を事実上解体させざるを得なくなった。残った漁船は HA 氏が操業し、彼の子どもたちとその配偶者らがクルーとして働いている。かつて漁船が 4 隻あった時代にクルーとして働いていたクランの他の成員は、いまは次節で述べる新たな事業に関わっている。

### 3 W クランの新事業

漁業の衰退とともに、W クランでは新たな事業が漁の操業と並行して模索されてきた。ここではそれらの事業を 4 つとりあげ、調査にもとづく現段階の状況を記述する。各事業を担うメンバーについては適宜図 3 を参照されたい。

#### 3-1 海上輸送業

サケの減少が深刻になった 1990 年代、バンクーバー島周辺の水域にはすでに養殖場が多数設置されていた。養殖業、とくにアトランティック・サーモンとホタテの養殖は、衰退する漁業を補う新たな産業として政府からおおいに注目されていた産業であった（立川 2008, 2020）。当時の世襲チーフ BO も、漁のオフシーズン時のパートタイム労働として養殖場で働くことを若いクラン成員たちに推奨していたし、また漁業の成果が深刻なほど芳しくない場合にはみずから養殖場で働くこともあった。しかし、技能段階に応じた厳格な序列のある漁師集団で頂点に君臨していた BO や HA らにとり、漁船上では彼の部下となる若いクランの男たちと養殖場労働で同等に扱われるのはきわめて屈辱的であったに違いない。そこで BO は HA と計画し、当時バンクーバー島周辺水域での養殖企業としては最大手であったノルウェー資本のストルト・シーファーム（Stolt Sea Farm）と契約し、養殖場の網を洗浄する仕事を開始した。この仕事に従事したのは、BO の息子である HA、RI、BN、EU 氏であった。このうち HA、BN、RI 氏は漁の際には船長であったことに留意されたい。これが 2000 年のできごとである。

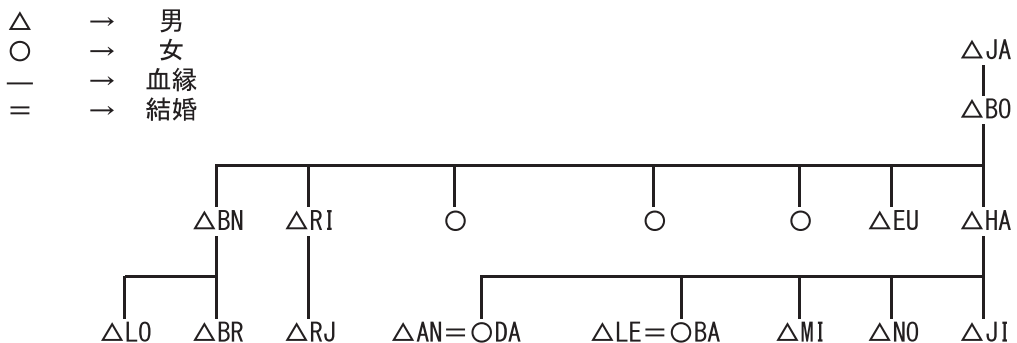


図 3 W クランの構成員

その翌年、BO と HA は新たに孵を購入し、バンクーバー島北東部周辺水域に点在する養殖場間に必要な物資を輸送する事業を開始した。これに際し、彼らは孵の名前にちなんで〈AH 社〉



という名の会社を新たに設立し、ノルウェー資本の大企業、マリン・ハーベスト（Marine Harvest, 旧ストルト・シーファーム）と再契約を交わした。高額契約をとりつけることができた彼らはこの事業をクラン内のできるだけ多くの成人男性でおこなう大規模なものにしようと試みており、HAとその兄弟、そして彼らの息子たちのほとんどをこの仕事に従事させた。私が調査した2003年当時、彼らは3つのグループにわけられ「5日勤10日休」というシフトで働いており、1回のシフト（5日間）で1,500ドル（日本円で約15万円）を得ていた。1か月に2回のシフトがあるとする、実質労働は10日しかないものの約3,000ドルの月収が得られたことになる。

この事業は現在もつづいているので、2000年の養殖網の洗浄作業から数えると20年つづいていることになる。その意味では〈AH社〉の事業展開は非常に安定したものともみなすことができるだろう。しかし、過去においてその成長を阻害する事件や要因がなかったわけではないし、その要因のいくつかはおそらく今後も〈AH社〉の成長を妨げる可能性がある。過去に〈AH社〉が直面した大きな衝撃的事件の1つは、2014年に孵のAHが航海中岩に衝突して沈没し、そのシフトの船長だったHAの甥が溺死した事件である。この悲惨な事件はWクランの成員たちに心痛を、〈AH社〉には孵の損失をもたらしただけなので、一時的に同社の活動を中断させたのだが、事業を永久に停止させるにはいたらなかった。現在〈AH社〉は新たな孵を用意し、それにHAが残した1隻のまき網漁船とあわせて事業を再開している。しかしこの事業には、〈AH社〉設立当初からもっと大きな社会的問題がずっとつきまとい続けた。それは、彼らが依存する養殖業そのものが抱えている問題である。バンクーバー島周辺水域での養殖業は、2000年頃からずっと環境汚染の源であるという批判に晒されてきた。そしてWクランの海上輸送も養殖業との密なつながりにもとづく以上、同様の批判から免れることはなかった。多くのクワクワカワクが反養殖の態度を貫くなかで、WクランおよびHAの名は、「経済を優先し、環境汚染に加担する者」として批判的に広まることもあった。

先述の通り、〈AH社〉による海上輸送業は現在もつづいている。しかしかつてとくらべると、労働者数などの面で明らかに規模が縮小されている。図3で現在現場にてシフトを担っているのは、RIとその息子RJ、BNとその息子LOのみで、彼らを中心にしたシフトにイギリス系カナダ人クルーが数人雇われている形である。かつてこの仕事で主力となっていたHAの息子たちは現在この事業からほぼ手を引き、何人かはつづいて紹介するいくつかの事業に参加している。こうした〈AH社〉の事業規模の縮小には、おそらく養殖業をめぐる、こうした環境面での批判が背景にあると考えられる(3)。

### 3-2 陸上輸送業

2018年、HA氏は1台のクレーントラックを購入し、〈OS社〉という新たな会社を設立して陸上輸送業にも乗りだした。私の知る限りでいうと、トラックを購入したHAはみずからそのトラックを整備し、〈OS社〉を立ちあげたことを自身のフェイスブックで〈友達〉たちに周知した（もちろん私のところにもその投稿は届いた）。1台しかないトラックのドライバーは、彼の娘DAの夫ANが務めることになった。HAによるフェイスブック上の投稿には〈友達〉からたくさん「いいね（like）！」が付き、シェアされて拡散されたようだ。しかしSNS上によるこうした宣伝行為が本当に顧客の獲得、およびその増加につながっていたことを私が知ったのは、2019年秋の調査時のことであった。



写真1 〈OS 社〉のトラックと格納庫(2019 年著者撮影)



写真2 フェイスブック上の〈OS 社〉の広告  
(2020 年著者のフェイスブックからの  
スクリーンショットを加工)

2019 年秋、私が HA の家を訪れた翌日、HA は私をキャンベル・リバー北西部の森のなかの一画に連れていった。60 エーカーもある森のなかの開けた土地には、トラックが3台（本当は4台あるが1台は仕事でその場になかった）、その格納兼修理スペースと小さな事務所があった（写真1）。つまり HA は、1 年足らずで〈OS 社〉を4台のトラックを使い運送業をおこなう、60 エーカーの土地と事務所付きの会社にまで成長させたことになる。事務所では HA の長女 BA が受付兼事務員として働き、格納庫には BA の夫 LE ともう1人のイギリス系カナダ人が整備士として働いていた。また、私は会うことができなかったが、AN のほかドライバーもさらに2人雇用していた。さらには、HA の三男で、2019 年に経営学修士号を取得した MI が〈OS 社〉（およびつぎに紹介する〈RS 社〉）の経営コンサルタントとして人事と経営全般を任されるようになっていた。HA は週に2回ほど〈OS 社〉を訪れるが、基本的には自宅におり、基本的に携帯電話での通話やメールなどで仕事の指示をだしていた。誇張ではなく、彼の携帯電話は本当に3分に1回は鳴っていた。

以上の状況は、2019 年秋に私が現地で把握したものである。それから約1年経った2020 年8月、私がフェイスブックを通じて HA に尋ねたところによれば、〈OS 社〉は2020 年のコロナ禍においても事業を順調に進めており、さらにトラックを3台購入し、できるだけ早く事業で使用できるよう整備しているところだということだった。また、9月上旬のフェイスブックの投稿によれば、〈OS 社〉は新たに数人のドライバーを募集しているということだった（写真2）。

### 3-3 サンドブラスト業

サンドブラスト業とは、コンプレッサーによる圧縮空気に研磨剤を混ぜて、ものの表面を加工する事業である。HA は〈OS 社〉を立ちあげた翌年となる 2019 年、もともと存在したサンドブラスト業の〈RS 社〉を買収し、〈OS 社〉の事務所のある森の区画から車で 5 分ほど離れたところにやはり 60 エーカーの区画を借りて〈RS 社〉の事業に乗りだした。

2019 年秋、私が HA とともに〈RS 社〉の敷地を訪れたとき、だだっ広い土地には小さな作業場があるだけで、それ以外の空き地にはこれから研磨する球状の錘とすでに研磨されきれいに着色しなおされた錘がおかれていた（写真 3）。作業場では W クランの男（彼はセディン姓ではないが）とイギリス系カナダ人の技術者の 2 人が働いていた。〈RS 社〉にはこのほか、先述した〈OS 社〉の受付兼事務員をしている HA の娘 BA がやはり受付をしており、HA の三男 MI が経営面を担当している。私が知る限り、〈RS 社〉にはこの 4 人と HA をふくめた 5 人しかいない。小規模な事業ではあるが、HA のいうところによれば、2020 年のコロナ禍においても順調に展開されているということである。この事業の紹介や宣伝も基本的にはフェイスブック上でおこなわれているが、私は 2020 年 9 月まで〈RS 社〉に関する投稿をみたことはなかった（だいたい〈OS 社〉に関するものだった）。

### 3-4 家屋の壁と庭の清掃業

HA の子のうち三男の MI と長女の BA は父の新事業に直接関わっている。次女の DA は父



写真 3 〈RS 社〉敷地内の、すでに塗装された錘  
(2019 年著者撮影)

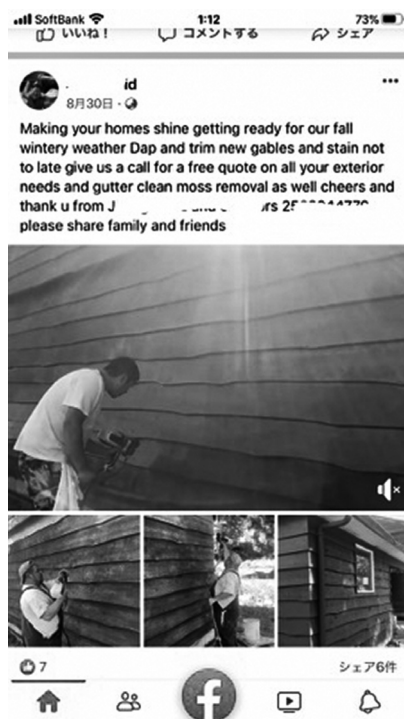


写真 4 JI が開始した〈GE〉の  
フェイスブック上の広告  
(2020 年著者のフェイスブックからの  
スクリーンショットを加工)



の事業を手伝ってはいないが（しかし彼女はきわめて優秀な漁師である）、彼女の夫 AN が〈OS 社〉のドライバーとして活躍している。HA の次男 NO は、かつて〈AH 社〉で海上輸送をやっていたものの、現在はアルバータ州の炭鉱で働き多額の給料を得ている。それに対し、次期世襲チーフである長男の JI は、ここ数年、父の命でしばしば漁撈（food fishing, クラン成員の食料獲得のためにおこなう漁）をおこなうだけで、現金を獲得できるような経済活動には一切従事していなかった。

しかし 2019 年、突如フェイスブックに JI は〈GE〉という「店名」のようなものを掲げ、水圧洗浄機で家屋の壁や庭の清掃する事業を開始したことを宣伝する投稿をし、自身の〈友達〉たちに、仕事を依頼するか、もしくは投稿をシェアしてほしいと頼んだ。会社を法人化して登録した父 HA とは違い、JI によるこの仕事は事業と呼ぶにはおこがましいほど、個人的で緩やかなものである。

JI は、依頼があって仕事をした際にはそれを動画撮影してフェイスブックに投稿し、依頼がないときにも宣伝のために投稿をしている。投稿の文体——すべての文字が小文字で書かれ、主語と句読点が省かれた、きわめてラフな文体である——をみる限り、彼はこの仕事を本格的に事業化するつもりはなく、あくまで個人的な交友関係の内に需要があればよいと考えているように印象付けられる（写真 4）。JI がどこまで本気でこの仕事に取り組もうとしているのか、そもそもこの仕事は長くつづくのか、私には甚だ疑問であるが、それでも投稿をみている限り、1 か月に 1 回くらいは仕事の依頼があるようだ。

#### 4 若干の考察——結びにかえて

以上の実情報告をふまえ、本節では以下 3 つの点に対して分析をしたい。その論点とは、1) これらの新たな事業はかつての漁業にとって代わることができるか、2) W クランの事業展開は、クワクワカワクならびに他の先住民による起業の手本となるか、3) 起業と SNS にはどのような関係があり得るか、である。

##### 4-1 新事業は漁業にとって代わることができるのか

2009 年に発表した拙著の結論は、ごく簡単にいえば、いくら彼らがさまざまな事業に手を染めたとしても、それらは漁業操業を補うものであり、彼らの本職はあくまで漁師なのだとことになる。そしてこの結論は、少なくとも W クランの面々にとってはいまも変わっていない。

HA は度重なる漁業不振のせいで 4 隻あったまき網漁船のうち 3 隻を売却した。しかし 4 隻すべてを売却して完全に漁業から足を洗うという選択肢は、彼には絶対がない。時間があり、政府（カナダ漁業海洋省）の許可があれば、彼はいまなお喜び勇んで頻繁に漁にでかけるからだ。現に 2020 年、彼らにとってはもっとも需要の低いカラフトマスの漁撈（4）が認められたとき、HA は大変喜んで出漁したことをフェイスブックで報告していた。また、まさにこれを書いている 2020 年 9 月下旬、彼はシロザケ漁撈にでていることを喜びとともにフェイスブックにて報告している。さらには、近年彼の弟 BN も、一度は手放した漁船の 1 隻を買い戻し、政府のための試験漁（test fishing, ある地点のサケの資源量を調査するための漁）を開始している。カラフトマスやシロザケの漁撈にせよ、あるいは試験漁にせよ、これらの漁では商業的な操業の醍醐味である「漁獲が多ければより多い収入が得られる」という常識は通用しない。し

かし彼らにとって、それは大きな問題ではない。漁の現場にでること。これこそが重要なことから。

先述の拙著（立川 2009）で、私は「漁をやっているクワクワカワクゥはかっこいい」という、みずからが抱いた漠然とした印象を、なんとか社会学的な用語で説明しようと試みた。魚群探知機を使わずみずからの勘と経験だけで獲物を追い、多くの漁獲を得る彼らは、しばしば彼らの口から発せられる農民やサラリーマンへの冗談交じりの蔑視（「やつらはただ待っているか、指示されたとおりに動くだけだ」と相まって、野生（自然）を尊重しつつもそれと対峙し、能動的に動き、戦うみずからの姿を常に再認する。そして漁の成功は、この戦いに勝ったことを示している。同時にこの経験は、サケ漁業という大型機械を有した近代的な産業に対し、「われわれ先住民」がそれを自分流に飼いならして手なずけた証でもある。彼らは自然に勝ち、近代化も手なずけた。漁という行為は、これらの事実を彼らに誇らしげに語ってくれるのである。

さらにいえば、単純に「海にでる」ということがもたらす、ある種の高揚感も忘れてはならないと思う。出港の日、段ボールに入った重い荷物（おもに食料）をくわえタバコで船に運び込み、ある程度準備が終わるとデッキに船をつなげていた縄をほどく。その向こうには、彼とのしばしの別れを惜しむ、彼の恋人や家族が見守っている。やがて船はホーンを鳴らし、出発する。彼はデッキでほどいた縄をきれいに畳みながら、彼を見守る恋人や家族に笑顔で手を振る。顔にあたる風も、水しぶきすらも心地よい。彼は捨てる前のタバコを深く吸い込み、空に向かって煙を吐きだす。その空にはかもめが飛び、運がよければ鷺も飛んでいる。イルカが併走し、運がよければクジラやシャチも併走する。そして思う、「やっぱり漁にでるのは気持ちいい」。2000年に公開された映画『パーフェクト・ストーム』（*Perfect Storm*）でいくらか誇張されつつ描写されていたこういったシーンは、「別れを惜しむ、恋人や家族が見守る」点をのぞいて、私ですらいまだに出漁時に再認することである。こういった経験と感覚は、けっして学術論文に書かれることはないが、彼らが漁をつづける理由を考える上で、けっして無視できないものだということに間違いはない。

つまり、これらの理由により、W クランの新事業は、漁にとって代わることはない。しかし漁がもはや現金獲得の主たる手段ではなくなっただけで、新たな事業は、漁に代わって彼らが現金収入を得る主たる手段であり、さらには、彼らの大好きな漁をつづけるため、漁船を維持するために必要な費用を稼ぐ手段でもある。

#### 4-2 他の集団の手本となり得るか

前節で報告した W クランによる新事業は、クワクワカワクゥ、ならびに他の先住民の手本となるだろうか。つまり、他の先住民が将来経済的自立のために何かしら事業をはじめようとするときに何か参考にできるだろうか。この問いについて考える前に、まず私が知る限り、そして私が HA 氏に質問した限りにおいて、他のクワクワカワクゥで W クランと同様に何かしらの事業を展開している例がどれくらいあるかを紹介しておこう。先住民アートの制作をおこなう一部著名アーティストの家系の例をのぞくと、先住民の行政単位であるバンドを単位とした養殖場経営の計画の例が2例、同じくバンドを単位とした宿泊ロッジの経営の例が1例あるほか、先住民が個人で営む事業としてモーター経営の例が1つ、養殖した魚の加工場の経営の例が1つある。ここでは、バンクーバー島北端のポート・ハーディに住む、ウォーカー家（仮名）による加工場の例をもう少し詳しくとりあげたい。

ウォーカー家のリーダーもまた、W クラン（セディン家）と同様に、サケ漁業の全盛期には漁業に多大な投資をしていたことで知られている。W クランが4隻まき網漁船を所持していた2000年当時、ウォーカー家は8隻ものまき網漁船を所持していた。当時クワクワカワクウの一族が所有するまき網漁船数では最多であった。漁業が衰退した現在、その漁船数は減少したらしいが（何隻になったかは不明）、彼らは——これまたW クランと同様だが——養殖企業の地元への進出を新たな経済的機会と捉え、養殖場の魚を加工する工場を建設した。現在、ウォーカー家だけでなく地元の多くの先住民がそこで雇用を得ている。

さて、ウォーカー家とW クランには、いくつか共通点がある。まず、両者ともにサケ漁業の衰退する以前は漁業に多大な投資をしていたこと、そして漁業の衰退した現在でも漁船をすべて手放してはいないことである。つぎに、クワクワカワクウには少数派であるが、地元水域に進出してきた養殖企業に対して肯定的な態度をとり、そこに新たな事業の機会を読みとったことである。最後の共通点は、ともに事業をバンド単位でおこなうわけではなく、あくまで個人（W クランならHA、ウォーカー家ならそのリーダー）が自分の資産で事業をはじめたことであり、そこにそれぞれのクランないし一族が雇用される形をとっている点である。W クランの世襲チーフであるHAとウォーカー家のリーダーは、互いを尊敬しあっており、養殖場による環境汚染を検討するフォーラムがあった際にはともに養殖場擁護（つまり養殖場による環境汚染の可能性を否定する）の立場から議論に参加していた。

以上の共通点は、W クランの事業が他の先住民の手本になるかを考える際、大いに示唆に富むだろうと私は考えている。

まず、両者が漁師として長い間活躍してきたこと、しかもまき網漁船のような大型漁船を複数所有するなど、深く携わってきたことは、少なくとも2つの点で重要である。第1に、漁船を所持した形で漁師をやっていた事実は、好むと好まざるに関わらず、養殖業と深い関わりをもたらしやすくなる。第2に、漁船の所有は、起業に不可欠な投資という行為に彼らを慣れさせる結果をもたらしている。

では、この第1の点から説明しよう。自身の漁船を所有する漁師が、否が応でも養殖企業との関わりが深くなりやすいことはあまり知られていない。1つの例をだそう。私が2000年にHAらと暮らしていた頃、ある日突然彼はカナダ漁業海洋省から電話で依頼を受けた。船をだして養殖場から逃げたアトランティック・サーモンを捕らえてほしいという依頼だった。アトランティック・サーモンが太平洋に逃げだせば、地元の生態系に大きな影響を及ぼすことは容易に想像できる。だから船をだすことは養殖業に賛成だろうが反対だろうが、彼らには必須の仕事である。しかも、こうした事件は決して少なくない。これらの小さな事件の積み重ねが、彼らと養殖業のあいだに深い関わり——それが肯定的であれ否定的であれ——をもたらしたことになる。

もっとも、漁船を所有するクワクワカワクウで、こうした依頼を受けた人の大半が養殖企業の失態に対してそれを批判する立場に回することは容易に想像できるだろう。実際にそうであった。しかしHAとウォーカー家のリーダーは、むしろその失態に対し迅速に行動した養殖企業の判断力と行動力、そして協力した漁師たちに多額の報酬を払った経済力に感心し、新たな事業を開始するヒントを得た。つまり両者が漁に代わる事業を養殖業に関連するものから着手したのは、自身の漁船をもつ漁師として養殖業と深く関わったこと、さらに養殖企業に肯定的な態度をとったことが理由だと考えられる。

以上のことから得られる帰結は、養殖業に反対する過半数のクワクワカワクゥにとって、ウォーカー家とWクランの事業展開はとくに参考にならないということである。しかし問題はそれほど単純ではない。現在いくつかのバンドが養殖場の経営に乗りだそうと模索していることは先述した通りだが、そのなかにはかつて養殖業反対の急先鋒だったバンドも入っているからである。

経済的自立をとり戻したいが、養殖とは手を結びたくないという反養殖派のバンドは依然として多い。しかしそのいくつかは、ためらいつつも養殖業を認めはじめた。あるバンドは居留地内のある海岸でホタテの養殖を計画し、またある別のバンドは環境への負荷の大きな海中での養殖を避けて、陸上で養殖をしようと計画している。これらのバンドに共通するのは、今までのがってきた「漁業の復活」という願いの諦めである。養殖場設置を計画するあるバンドのリーダーによると、彼は当初、養殖場がなくなれば地元水域の環境が改善され、漁業が復活するという夢をみていた。しかしどうやらサケの減少はもっと根深い、グローバルに展開する気候変動に起因すると察したとき、ただ養殖に反対するだけではバンドに明るい未来はやってこないと考え直したようだ。そこでこれらのバンドはマリン・ハーベストに大企業とは違う環境保護の方法で、みずから養殖場を運営してみようと考えたわけである。

しかし、これらの養殖場設置計画は10年以上前から話は聞くものの、私が知る限りまだ実行に移されていない。そこには、「すでにある養殖企業と契約し、下請け事業をする」とことと、「養殖場そのものを設置し経営する」とことの難しさの違いがあるほか、バンド単位で計画し、経営することが抱える問題があるように思われる。そしてここに、Wクランとウォーカー家が長きに渡って漁業に多大な投資をしてきたことがもたらす重要な点の2つ目が関わってくると考えられる。

バンドで事業をはじめる場合、そこにはカナダ政府はもちろん、バンドのメンバーたちの同意が必要である。また、資金繰りをするためには企業との契約も必要になるかもしれない。それに対し、WクランのHAやウォーカー一族のリーダーは、あくまで個人名義で起業することになるので、これら煩雑な手続きやメンバーからの同意を必要としない。彼らはこれまでも漁業に対して多大な投資を「漁船の購入」という形でおこなっており、収入を新事業のために投資することに手慣れている。そしてそれだけの収入をもっている。みずから会社の社長として君臨し、ただでさえ高い失業率を抱える先住民社会において自身のクランのメンバーや他の先住民たちに雇用を与えてきた彼らは、ほとんどのクランメンバーから支持をとりつけることができるし、仮に反対者がいてもそれらの人物を雇わなければいいだけのことである。つまり、投資に手慣れた資産家としての個人がはじめる事業という体裁をとることで、彼らの事業はバンド名義の事業よりも容易に着手され得るのである。

Wクランやウォーカー家とその他のクワクワカワクゥとの比較にもとづいた以上の議論からは、やはり「他の先住民（とくに資産をもたない先住民）にはWクランやウォーカー家の後につづくことはできない」という帰結しか得られない。それでも私は、今後他のクワクワカワクゥがWクランに倣い、新たな事業に乗りだす可能性はあると考えている。その可能性を考える上で鍵となるひとつの要素がSNSである。そこで最後に、事業とSNSの可能性について整理しよう。



#### 4-3 起業における SNS

W クランの世襲チーフである HA が陸上輸送の〈OS 社〉やサンドブラストの〈RS 社〉の事業に着手するにあたり、フェイスブックをおもな広告の手段として使ったことは前節で述べた。彼は最初から、地元のテレビ、ラジオ、新聞の広告はもちろん、インターネットのホームページも使う気がなかったのは明らかである。フェイスブックなどの SNS の投稿を広告に利用することには、少なくとも明らかに 2 つの意義がある。

第 1 に、フェイスブックへの投稿による宣伝は、他のマスメディアを利用するよりも簡単で、しかも無料である。この、「簡単で無料」という意義を過小評価してはならない。とりわけ HA がクワクワカクウの社会的リーダーたちがこれまでさまざまな漁業団体、養殖業団体を結成し、ホームページを作成するたびに、その作成と管理が難解すぎてすぐに滞ってしまっていた事実をふまえれば、なおさらである。ホームページの作成は、彼らにとっては難解で、それ故専門の業者に依頼せねばならなかった。何人の人が閲覧してくれるかわからないホームページの維持のために、専門業者に高いお金を払いつづけるのは彼らにとって生産的な行為とは思えず、だいたいの場合は途中で頓挫してしまっていた。しかしフェイスブックを利用すれば、自分で写真を撮り、それをみずから作成した簡単な文面とともに投稿すればよい。また、みずからの〈友達〉たちがほぼ確実に閲覧してくれるという保証もある。つまりこの「簡単で無料」という特性は、彼らが持続的に広告するという点で、極めて効果的なのだ。

第 2 に、HA の投稿には彼の〈友達〉からたくさんの「いいね！」が付き、さらにその投稿がシェアされ拡散されたという、SNS 本来の意義がうまく活用されたことがあげられるかもしれない。この方法は、うまくいけば地元のテレビ、ラジオ、新聞を使うよりも広く情報を拡散できることだろう。

ただし、この第 2 の点はあまり強調されるべきではない。おそらくフェイスブックなど SNS に事業の広告を投稿すれば、その投稿には〈友達〉から「いいね！」がつき、シェアされるかもしれないが、それが必ずしも顧客の獲得につながるとは限らないからである（だからこそ私は 2019 年調査時に、〈OS 社〉の盛況ぶりに驚いたのだ）。むしろここでは、そもそも HA のフェイスブックの〈友達〉たちが、元来漁業、養殖業、海上輸送業などで彼と密な交流をもっていた人たちであることを考慮しなければならないだろう。HA の〈友達〉が〈OS 社〉の顧客になることはほとんどないが、これら〈友達〉から「HA は信頼できるやつだ」、「あいつはやり手だ」などの口コミを伴った紹介があったからこそ、〈OS 社〉に顧客が付いたことを忘れてはならない。そうでないと、オンライン上の「顔の見えない」関係でもたやすく事業ができてしまうのだという誤解を招きかねない。

だが、もし先住民が何かしらの事業に着手しようとする場合、SNS がある種の「手軽さ」を与えてくれるのは明らかなように思える。その端的な例が、JI が去年はじめて家屋の清掃業だ。どこのホームセンターにもあるような水圧洗浄機を 1 つ買うだけで、その気になれば事業をはじめられ、その広告はフェイスブックでやればよい。それによって顧客が付くかはまた別の問題ではあるが、宣伝に SNS を利用することには、何か事業をはじめるときにあたり、今までにない手軽さ、気軽さを与えてくれるのはたしかなことであるように思う。ましてやそれが、JI がはじめて清掃業のように、私的なものであればなおさらである。

## 注

- (1) このうち 2019 年の調査は、科学研究費補助金（基盤研究 A「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」、代表：岸上伸啓、課題番号：19H00565）を活用したものである。日本学術振興会には深く感謝します。
- (2) 北西海岸では、他人の漁船の船長（日本風にいえば漁労長）を skipper といい、自身の漁船の船長を captain と呼んで区別する。
- (3) 〈AH 社〉が活動するバンクーバー島北東部水域のプロートン群島は、マリン・ハーベスト社およびその他の養殖企業の所有するアトランティック・サーモンの養殖場が多数あるが、2000 年をすぎた頃から、プロートン群島を周遊するカラフトマスの稚魚に大量のサケシラミ（sea lice）が付着していることが問題視された。このサケシラミは養殖場から放出されたものかどうかをめぐり、環境保護団体、地元の資源ユーザー（多数派の先住民を含む）と養殖企業、政府のあいだで激しい議論が交わされてきたが、今のところこの議論に決着はついていない。この問題を俯瞰的に概説したものには以下のものがある（BOCKING 2012; 立川 2008; VIATORI 2019）。
- (4) ここでの漁撈とは、先住民だけに認められた自給用の漁のことである。現地では、フード・フィッシングと呼ばれる。ふだん HA は、漁撈においてベニザケとシロザケを捕獲し、カラフトマスは捕獲しない。

## 参考文献

- ASSU, H., with J. Inglis, 1989 *Assu of Cape Mudge: Recollections of a Coastal Indian Chief*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- BOAS, F., 1966 *Kwakiutl Ethnography*, H. Codere (ed.), Chicago: University of Chicago Press.
- BOCKING, S., 2012 "Science, Salmon, and Sea Lice: Constructing Practice and Place in an Environmental Controversy." *Journal of the History of Biology* 45-4: 681-716.
- DONALD, L., and D. MITCHELL, 1975 "Some Correlates of Local Group Rank among the Southern Kwakiutl." *Ethnology* 14-4: 325-346.
- GALOIS, R., 1994 *Kwakwaka'wakw Settlements, 1775-1920: a Geographical Analysis and Gazetteer*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- SPRADLEY, J. (ed.), 1969[1972] *Guests Never Leave Hungry: The Autobiography of James Sewid, a Kwakiutl Indian*. Montreal and Kingston: McGill Queen's University Press.
- 立川 陽仁、2008 「カナダ・バンクーバー島の先住民クワクワカワクウとサケの養殖業——経済 vs. 環境をめぐるとの次元」岸上伸啓（編）『北アメリカ先住民の社会経済問題（みんぱく実践人類学 4）』明石書店, pp. 273-300。
- 、2009 『カナダ先住民と近代産業の民族誌——北西海岸におけるサケ漁業と先住民漁師による技術的適応』御茶の水書房。
- 、2020 「カナダ太平洋沿岸水域における気候変動の影響に関する近年の研究動向」『人文論叢』37: 79-88。
- VIATORI, M., 2019 "Uncertain Risks: Salmon Science, Harm, and Ignorance in Canada." *American Anthropologist* 121-2: 325-337.